

『表現の不自由展・その後』の展示再開を要望します。

愛知県知事 大村秀章様
名古屋市長 河村たかし様

今年8月1日に始まった国際芸術祭『あいちトリエンナーレ2019』の企画展『表現の不自由展・その後』が、わずか三日で展示中止に追い込まれました。河村たかし名古屋市長は、自ら、あいちトリエンナーレ実行委員会会長代行であるにもかかわらず、展示について「政府見解と異なる」「日本の心を傷つける／日本国民の心を踏みにじる」として、あいちトリエンナーレ実行委員会会長である大村秀章愛知県知事に展示中止を求める抗議文を提出し、「平和の少女像」展示者には「やめれば済む問題ではない」と謝罪を要求するなどしました。この一連の発言に誘発されるように同企画展事務局への誹謗中傷やテロ予告が殺到したため、主催者が「安全で円滑な運営ができない」とやむを得ず中止に至ったものです。

私たち日本バプテスト連盟理事会は、かつて政府が「表現の自由」を弾圧して「検閲」を行い、「思想信条の自由」を奪うことによって、多大な人命の犠牲を強いる戦争へと突き進んだ過去の歴史への反省に立つとき、このような暴力的圧力に対して立ち向かうべき行政の長が、むしろその先頭に立って「表現の自由」を著しく侵害したことに対し私たちは強く抗議すると共に、事態が速やかに改善されることを求めるものです。

「表現の自由」は、多元的な価値観の共存を前提とする民主主義を支える必要不可欠な人権であり、日本国憲法においても最大限尊重される地位を占めています(第21条)。時の公権力が「政府見解と異なる」という理由での介入、また、「日本の心を傷つける」などという抽象的かつ情緒的な理由で「表現の自由」を侵害することが決してあってはなりません。

そもそも『表現の不自由展・その後』は、過去に抗議や付度によって公立美術館などから排除された作品を集め、それらの作品が撤去・拒否された経緯とともに来場者が鑑賞することで、いまの日本の「表現の自由」を巡る状況に思いを馳せ、議論し、各人が考えるきっかけにしていくことを願って企画された展示です。展示中止に追い込んだ暴力的圧力を黙認するのではなく、なぜ「表現の自由」が重要な人権とされているのかを私たち一人ひとりが考え、このような社会に一人一人が主体的に自らの担うべき働きについて考えを深めていく機会にしたいと願います。

私たちバプテストは、約四百年前の英国で各個人の信仰の自由を尊重する闘いの中に生まれ、民主的な教会運営を通して主なる神の御旨を聴き取ることを選び取ってきました。それ故、私たちは、「自分と異なる意見」を暴力的に圧殺するのではなく、常に多様な意見との対話に開かれ、聖書に真理を共に尋ね求めていく成熟した信仰を持ちたいと願っています。

国際芸術祭『あいちトリエンナーレ2019』の企画展『表現の不自由展・その後』が展示中止に追い込まれたことは、「表現の自由」の侵害であり、これにより私たちは、この大切な事柄を考える機会、つまり「知る権利」をも奪われました。だからこそ、今回、「表現の自由」に対して行政が不当ともいえる圧力をもって介入したことに強く抗議します。そして、行政こそが暴力を断固として否定し、「表現の自由」への不当な介入や圧力から表現者を守り、安全な環境を整えて、『表現の不自由展・その後』の展示が早期に再開されることを要望いたします。

2019年8月21日

日本バプテスト連盟理事会
理事長 加藤 誠